

街歩きその 70

椿散る銀閣寺から哲学の道



散り椿が苔庭を彩る銀閣寺

桜の蕾膨らむ哲学の道



東山慈照寺銀閣



南禅寺の三門から開花まじかの桜が…



琵琶湖疎水、南禅寺の水路閣



～京都府京都市左京区～

京都東山のふもと、左京区・若王子神社から法然院下を銀閣寺に至る疎水べりの小道、約1.5キロを哲学の道と呼ぶ。哲学者西田幾多郎が散策、思索にふけたことからこの名がついたと云われる。春は兩岸の関雪桜で花のトンネルとなり、疎水に散り流れる花びらもひとしおの風情とか。また、その時季は、歌舞伎「楼門五三桐」の中で石川五右衛門が三門からの満開の桜の景色を愛でて「絶景かな、絶景かな」と名台詞を吐いた南禅寺の桜も見頃を迎え、およそ哲学の道には程遠い賑わいとなりそうだ。そんな喧噪を避けて、一足早い早春に訪れた。

まずは、東山慈照寺銀閣へ。銀閣寺の名の由来は江戸時代、金閣寺に対し、銀閣寺と称せられることとなったといわれる。総金箔張りに光り輝く金閣寺に対し、足利義政が、生涯をかけ自らの美意識のすべてを投影し、東山文化の真髄たる簡素枯淡の美を映したとされ、500年の時を超えてその真髄を今に伝える。苔むした庭園の片隅に落花した椿の花が枯淡に彩りを添えていた。

哲学の道に足を踏み入ると、疎水に沿って整備された石畳の道が続く、両側からほんのりピンクがかかった桜が覆いかぶさるように続く。満開の桜を眼下に浮かべ、すれ違う人もない静かな道を南へ下る。両側の民家も景観に配慮して落ち着いた佇まいをみせている。

疎水際の道から外れて、南禅寺へ。突然目の前に煉瓦と石を組み合わせた壮大な構造物が出現した。琵琶湖疎水の水路橋で明治21年完成。南禅寺境内を通過するため、周辺の景観に配慮して田辺朔郎が設計、デザインした。アーチ型橋脚の風格ある構造物で、静かな東山の風景にとけこんでいる。終着点南禅寺三門からは今まさに咲かんとする桜があたりをピンクに染めていた。